

令和元年度いきいき秋まつり

錦江相撲大会



赤ちゃん土俵入りの参加者には手形と足型を押した記念色紙と紅白のねじり鉢巻が贈られ、健やかな成長を願った。

たくましく育ってほしい——。
赤ちゃんの健やかな成長を願う
32人が堂々の土俵入り

子どもの健やかな成長を願って行われる赤ちゃん土俵入り。この日は例年より多い32人の赤ちゃんが紅白の上まきを巻き、力士に抱かれて土俵に上がりました。塩をまいて土俵を清め、邪気を祓い清めるとされる四股を踏みます。四股は、赤ちゃんの魂をその体にしっかりと定着させるための所作と言われ、健康で丈夫にたくましく育ってほしいとの願いが込められています。実際に赤ちゃんの足を土俵に付け、

59人が繰り広げた熱戦 歴史ある大会に会場が沸いた

錦江中学校グラウンドに常設された土俵を舞台に、幼児から大人まで総勢59人が参加して錦江相撲大会が行われました。団体戦では幼児部門、小学生部門、一般部門に分かれて勝敗を競い、田代幼稚園、大原小学校、役場美青年が各部門で優勝。幼児部門では、行司に誘導されながら取り組む園児に会場から大きな笑いが、小学生部門では負けて悔し泣きする子、土俵際に必死に粘る子に盛大な拍手が送られました。収穫の秋に全国各地で行われる相撲大会。農作物が無事に収穫できたことに感謝し、子どもたちの健やかな成長を祈願して行われる奉納相撲には長い歴史があります。本大会の前身である神之浜相撲大会は戦前から行われ、一時期途絶えながらも大漁を願うえびす祭りを経て、秋まつりへ引き継がれました。当時を知る生見亨さんは「中学から見ていた歴史ある大会。当時から抜き相撲もあり、町外からも大勢参加して盛り上がった。商店街が提供した火鉢や畳、材木が賞品に並んだが、車も少ない時代で持ち帰るのも難儀でした。相撲に込める思いは今も変わらな——」と当時を振り返り笑みがこぼれます。秋の実りに感謝し、家族の健康を願う思いは今も引き継がれています。



1相撲のルールを教えながら取組を進める行司 2真剣な眼差しで取組に臨む姿に会場が静まる 3お互い負けられない一戦。土俵際の攻防に大きな歓声が上がった 4「礼に始まり礼に終わる」子どもたちの姿に会場から多くの拍手が送られた

小学生の部 優勝 大原小学校 A チーム

[写真左から / 敬称略] 黒田悠斗、野口新太、野口美羽、谷口琉依、宮田蓮、岩切和博、黒田凌成、有里脩希 [Aチームはメダル有]
大原小学校から2チーム参戦。優勝したAチームは次鋒が欠場により4人での参加となりましたが、予選を2戦2勝で勝ち上がり、決勝戦では接戦の末、田代小学校を下して不利な条件ながら悲願の優勝。校庭にある土俵で保護者や校長の胸を借りて練習を積んできた成果が実を結んだ瞬間でした。中堅の谷口琉依くんは全戦全勝で最優秀選手賞も獲得。



参加チーム数 / 各部門成績

優勝 田代幼稚園 笑点
準優勝 大根占幼稚園 ひかり保育園
参加チーム数 / 各部門成績
幼児 ▶ 3団体 / 小学生 ▶ 8団体 / 一般 ▶ 3団体
※中学生の部は参加チームなし

小学生の部 優勝 大原小学校 A チーム
準優勝 田代小学校
一般の部 優勝 役場美青年
準優勝 南隅防犯団



「勝ち」「負け」が全てではない 相撲を通じて体力や礼儀、相手を 思いやる気持ちを育てたい

競技としての相撲はもちろん勝敗を競いますが、勝ち負けだけが相撲の全てではありません。相撲には所作も多く、両手を羽のように広げる塵手水は武器を持っていないことを表し、四股には邪悪なものを遠ざけるという意味があります。勝利した力士の手刀には神様への感謝の意味が込められ、勝った力士が行う蹲踞には「へりくだる / うづくまる」との意味から相手への敬意を表す所作とも言われています。礼に始まり礼に終わる相撲の精神は、相手を思いやる気持ちに通じています。



錦江町相撲連盟
柳田純一 会長

平成25年から会長を務める。大根占出身の大相撲力士 大雄関(前頭筆頭)は叔父。

